

福社だより

397号

2025年12月
河内地区社会
福祉協議会

芸能と社会福祉

河内地区の郷土芸能といえば、まず神楽が思い浮かびます。他にも民謡として口説、音頭、盆踊り、木遣があり、労作歌として花田植、草とり、柴刈り、白挽、茶揉、粃摺、木挽、麦するぎ、馬子、祝、博多節、河内よいこと、サンコ節などがあります。

郷土芸能というと枕詞のように「伝統」という文言が付きますが、伝統はどういったことを指すのでしょうか。伝統とは、ある社会において歴史的に形成・蓄積され、世代をこえて受け継がれた精神的・文化的遺産や慣習です。いつから受け継がれたものを伝統というのかは、「世代をこえて」という時間の捉え方ということになります。明確な時間の捉え方がないため、受け止め方もまちまちですが、「伝統的工芸産業振興協会」は、工芸品におよそ一〇〇年間以上の継続という意味を定義しています。な

るほど一〇〇年かと思う人もいれば、たった一〇〇年かと思う人もいます。今回は、河内地区に伝わる神楽を芸能の俎上にあげて、社会福祉との関係性をひも解いてまいります。

河内地区には、上河内と下河内の二つの神楽団が存立しています。「ウチには二つも神楽団があるんで」と他所に行ったときに自慢できるんじやと言われる人もいます。成り立ちや活動はそれぞれの神楽団のホームページに書いてあるので、そちらをお読みいただくこととして、両神楽団とも、一〇

〇年以上継続していますので伝統を冠しても差し支えはなからうかと思えます。舞



上河内神楽団

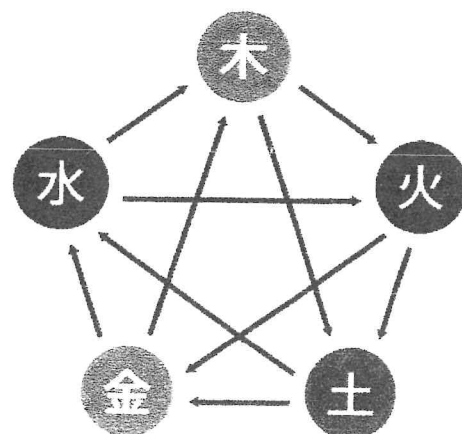


下河内神楽団

われている演目は、それこそ室町時代から続いているという文献が残っていますから、両神楽団の舞う十二神祇の舞はまさしく伝統芸能です。この演目の原典は、一四七七年に書かれた五行祭祭文に求めることができます。

髓まで沁み込め陰陽五行説

五行祭は古代中国の思想で、一つの大元から出たものが陰と陽の二つとなり、別に五つに分かれた物質の基本となる木火土金水と合体するといった説です。これは陰陽五行説といわれています。日本に輸入されて以後、五つに即したそれらは、すべて神の為しうるものとして、主となる神をあてました。例えば、木は東方・春・青色・左方など、火は南方・夏・赤色・前方など、土は中央・土用・黄色・中方など、金は西方・秋・白色・右方など、水は北方・冬・黒色・後方など、象女神、土は中央・土用・黄色・中方など、壇安神といった具合です。これらは森羅万象の理や暦法、十干や十二支などとも結びつけられ、季節、気候、天気、暦などで生活をする農家を中心に広く信じられるようになり、当



時から近代に至るまで、というよりも、今でも暦や季節の行事などに色濃く残り、日本人の精神性の支柱となり続けています。

今年の秋祭りでも舞われた上河内神楽団の「王子」や「合戦」などの演目のもととなる五行祭祭文は、陰陽五行説を物語の形に改められたものです。

五行祭祭文

宇宙を治める二五〇歳の盤古大王は、后との間に四人の王子と四人の

王女がありました。死期の近いのを覚って、四人の王子に遺産を分配します。太郎王子には青竜王・青帝・青色・木性・東方・甲乙の郡・春三月を、二郎王子には赤竜王・赤帝・赤色・火性・南方・丙丁の郡・夏三月を、三郎王子には白竜王・白帝・白色・金性・西方・庚辛の郡・秋三月を、四郎王子には黒竜王・黒帝・黒色・水性・北方・壬癸の郡・冬三月を与えました。その時、后が懐胎しているのを聞かされて驚き、その子が王子ならば黄の旗のみを与えよといって亡くなります。大王の死後、四人の王子はそれぞれの遺産を大切に守っていましたが、悪王が一人現れ、その遺産を狙っているという噂を聞き、太郎王子の許に集まって、そのようなときがあれば一致協力して、事に当たろうと約束します。

悪王というのは、大王の五番目の遺児五郎王子です。五郎王子は自分の父親がだれか明らかでないことに不審を抱き、弓の師である弓場太郎に尋ねますが答えてくれません。母である后から兄四人の許に行つて尋ねてみよといわれて、兄たちを訪ねますが兄王子たちは用心して相手に

されないばかりか、四郎王子の館では鬼の子といわれ、殺されかけます。

五郎王子は母の許へ引き返し、母を問い詰めて真相を知ります。后は五郎王子に黄旗一旗をわたし、兄たちを訪ねて所務をもらえ、もし応じないで争いとならば、五河の川上にある高さ二十四万由旬（二百四十万キロメートル）の岩を城郭とせよ、また王子は東の城より五万騎、二郎王子は南の城より六万騎、三郎王子は西の城より七万騎、四郎王子は北の城より八万騎で攻め来るなら、五郎王子は九万騎の軍勢を催し、九曜星の力を借りて立ち向かえと教えます。こうして、いよいよ合戦となります。

五河の川下の大野が原に住む文撰博士は、ある日川水が五色に染まって流れるのに気づき、その原因を知ろうとして川上を訪ね、一人の女性が天羽衣を洗っているのに出会います。この女性は吉祥天女ですが、川水の汚れの理由は知らないといいます。文撰博士はさらに上流に遡って、十六丈もある大蛇に会って尋ねますが、この大蛇も知らないといいます。文撰博士はさらに上流で山神に会って、初めて五人の王子の合戦を知り仲裁に入ります。

ります。

しかし四人の王子たちは、五郎王子を兄弟とは認めません。文撰博士は、五人の王子に小指を食い切つて血を川に流させ、その血が混じり合うたことによって一腹一生であることを示し五人の王子を和解させました。

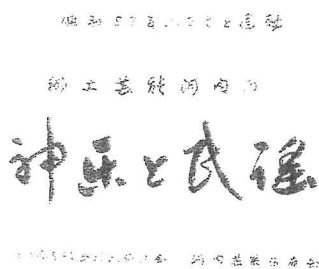
ここから、文撰博士の所務分けとなります。それは太郎王子には父大王からもらったもののほかに十千を、二郎王子には父大王からもらったもののほかに十二支を、三郎王子には父大王からもらったもののほかに「建除満平定執破危成納開閉」の暦の中段十二行を、四郎王子には父大王からもらったもののほかに「徳義生殺危害陽難厄」の間段を、それぞれ加増されます。五郎王子は兄たちと同じように、黄竜王・黄帝・黄色・土性・中央・戊己の郡をもらい、さらに二十八官を加え、兄たちが持つ三か月九十日ずつの中から十八日をそれぞれ抜いて土用としてもらうという提案をします。こうして五人の王子は、めでたく同様の遺産の配分を受けて、残された母后と姉妹と仲良く暮らしていきます。

これが五行祭祭文の梗概です。この祭文がいつ頃作られたものかは、明らかになっていませんが、廿日市市宮内にある山田家に所蔵されている「国郡志写」（一八一九年、上小深川村の書出帳）の中に、この祭文の一部が一四七七年七月一〇日、野登呂与左衛門御文と署名が入っています。この山田家は、上小深川村で永く神職と庄屋を務められ五十九代当主であった漢氏が発見し、広島県及び五日市町文化財保護委員であった真下三郎氏がつまびらかにされたものです。

郷土芸能河内の神楽と民謡

河内地区の芸能を語る際に忘れてはならないのが「河内芸能保存会」です。昭和

四十七年九月一日に、郷土芸能の保存と継承発展を目的に会員



三十七名で発足しました。初代会長は寺尾登氏、二代会長は広兼春雄氏です。事業の内容は、神楽団への協力として笛太鼓などの鳴物の援助、秋祭り、盆踊りの音頭、木遣の習得となつていきます。保存会が発足十年を記念して「郷土芸能河内の神楽と民謡」（発行 河内地区社会福祉協議会、河内芸能保存会、印刷・装丁 丸二印刷所、発行年月 昭和五十七年六月）を発刊しました。一年がかりで完成にこぎつけた力作です。このときの編集委員は、広兼春雄氏、丹田一郎氏、寺尾政人氏です。この冊子の企画段階から、当時の五日市町社会福祉協議会、河内地区社会福祉協議会が協力し資金援助等を申し出ています。

その目的は、冊子のまえがきと編集後記に集約されていますので、一部加筆してご紹介します。

まえがき

『現在河内における郷土芸能は何んと言っても神楽でありましょう。続いて盆踊、お祭りの俵もみ「きやり音頭」等がありますが、幸にも河内には上、下神楽団が現存していますが古い伝統を継承されています。も

う一団体白川神楽団がりましたが、民家に置いていた衣装や獅子頭が昭和二十九年ごろ火災により焼失し、後継者不足もあって悩んでいます。こうした時にあたり、ひとり神楽のみならず古くからこの地方に伝わっていた民謡、（きやり、音頭、作業唄）等々、殆んど忘れ去られてしまいう世情の中で、何とか現時点で出来る限り、古文書、口傳、先輩諸氏のご協力により資料を集めて後世に残る記録と後継者づくりのためにこの小誌の編集を企画しました。

文化遺産の伝承を通してこの地域の連帯意識の高揚と明るい住みよい地域づくりの一環に役立てれば幸いに存じます。』

編集後記

『やっと一応仕上げとなりました。昨年の八月に企画してずいぶん時間をかけました。編集委員のご協力で資料を集め、明治初期の「やまと假名」の高木文書に苦勞してこれに時間がかかりましたが、神楽、民謡ともに古文書資料が基で、どうにか素人なりのまとめとなった訳ですが、さて果たしてこの小誌が何程地域住

民の関心を持ってもらえるでしょうか。大きな期待を持っているわけではありませんが、今、やって置かなければ永遠に忘れ去られる物もありましよう。何が何でも、止むに止まらない気持ちで拙たない筆をとりました。

お陰様で大勢の皆さんの協力により充分ではありませんが出来上りました。足りない所は又識者の力にお願いするとして「神楽編、民謡編」として発刊いたします。この小誌は種目、詞文のみに止まっていますので：

次の課題は民謡の歌詞に肉を付ける曲節を付する事こそ大事なことに存じます。

引続いてこの歌詞を基に歌曲の録音をテープにおさめて両者を合わせて次の時代へと送り度いと思っております。

何が何でも地域の、うるおいのある住民の生活が幸せになるよう役立てればこれに過ぐるものはありません。郷土芸能保存と継承、地域福祉の向上に少しでも役立つ事を祈って止みません。

最後になりましたが、この企画に

ご理解願って「五日市町社会福祉協議会の資金援助」「河内地区社会福祉協議会」の明るい郷土づくり運動としてこの編集発行をすることが出来ました。厚く厚く感謝申し上げて御礼申し上げます。』

芸能と社会福祉

今、芸能を行う団体は、その活動を継承するために懸命の努力をしています。自分たちの活動が地域福祉の向上と地域コミュニティの活性化や再生に寄与するなどは考える暇はないと思いますが、団体の継承こそがその役割を果たすこととなります。だからこそ、河内芸能保存会が十周年事業として「郷土芸能河内の神楽と民謡」を企画したとき、社会福祉協議会は、いち早く資金援助等の協力を申し出たのです。

地域の連帯意識の高揚と明るい住みよい地域づくりへの寄与は、芸能だけにとどまりません。陶芸や和紙づくり、書、絵画、茶、大正琴、太鼓団など多くの団体の活動も一助となっています。

社会福祉協議会のみならず地域に住む人たちみんなで、これらの団体

の活動を継承していけるよう協力したいものです。

よろず相談の内容

一〇月から始めて、相談等がありましたので幾つかご紹介します。ふらりと遊びに来たよというものと、休耕田の草が繁茂しているの、刈って欲しいという内容、また今年は柿が豊作で、どの柿の木もたわわに枝がしなっています。熊のニユースを毎日のように聞くにつけ、とても心配で柿の木を伐採しようと思うが、どうしたらよいでしょうかという相談です。草刈りや伐採は、自分でできない場合は、知人か業者に頼むしかないのですが、今回は地元でボランティアをしている団体をお願いしました。

団体からは三名が来て、約三〇坪の幹から枝分かれした三本を伐採しました。専門業者ではないので苦勞しながら伐採し、数百個の実を取り込んで二時間の作業を終えました。依頼者は、この団体に、実費弁償相当の金額を支払ったそうです。

一斉改選後の民児協の概要

十一月二十八日(金)に、佐伯区民文化センターに於いて、委嘱状の伝達式・交付式が行われました。河内地区には、六人の民生委員児童委員がおられます。改選状況は次のとおりです。

現任	改選後
木下 中	退任
岸本 里子	再任
中原 裕子	再任
川本 里美	再任
山口 雅史	再任
香川 由紀男	再任

新任

糸賀 正樹	民生委員児童委員
木下 中	民生委員協力員
三宅 富士子	民生委員協力員

退任された木下さんは、長きにわたり委員を務められ八期(二十四年)地域貢献を続けてこられました。その功績が認められ昨年、厚生労働大臣表彰を受賞されました。

もう少し頑張っていたきたいところですが、委員の任期には年齢制限がありますので、今後は*民生委員協力員として委員のサポートを続けていただけるそうです。河内地区では、新たに二名の民生委員協力員

に就任していただきますので、これからも充実した活動が展開される予定です。

* 民生委員協力員は、民生委員児童委員の負担軽減と新たな担い手の拡大を図るものとして、平成二十七年十二月に創設された制度です。河内地区では、初めての配置となります。

餅つきボランティア募集

令和八年一月二十四日(土)、九時から河内公民館駐車場で行います。お手伝いできる人は、現地集合でお願いします。

一月二十四日といえば、大寒の最中です。きつと良いお餅がつけられると思います。振るってご参加をお願いします。

お礼 敬老敬愛事業

各町内会を通じて、敬老敬愛対象者に記念品を配布していただきました。ありがとうございます。

オモシロことは

「陸(ろくう)」

「おーい、勾配がついとるじゃあないか。こりゃあダメじゃ。そこは

陸(ろくう)にしとけえよ。」

今は昔、河内には舗装路は少なく、土の露出した道路が大半でした。道路には轍ができて中央部分が山となり端が谷となります。轍以外には草が生えます。一斉清掃とは言いません。道普請とみんな言っていました。道普請は、道路を平らにするところから始まります。草を抜いた後、鍬やらスコップで山を削り谷を埋めて水平にします。これが「陸(ろくう)」にする「こと」です。

建物でも水平に近い屋根を「陸(ろくう) 屋根」と呼びます。あんな風に道路を直していました。

辞書にも載っている標準語なので、しろうが、河内に嫁いできた方が、聞いたこともない。こりゃあ河内弁じゃと言っていたのをよく覚えています。

実はこの「陸(ろくう)」は、巻頭の陰陽五行説と密接な関係のある言葉です。ぜひ、ひも解いてみてください。

問合せは事務局へ

香川	090-2293-8947
藤井	090-9738-3974
中原	090-8359-7890